

「JENESYS2.0」2016年度中国社会科学院青年研究者代表团第1陣 参加者の感想（抜粋）

○中国と日本は「隣人」であり、それを変えることはできない。たとえ好きでも、嫌いでも、中日の両国民は、お互いに向き合っていかなければならない。相手のことを正しく知り、様々な角度からその国について理解することがとても重要だ。そのためには、人と人との直接的な交流の促進に力を入れ、両国の協力関係を拡充し、ネガティブな要素を取り除いていかなければならない。

上記のような認識から、私は次のことを交流やレクチャーなどで身近な人々に伝えていきたい。中日両国は、平和的な関係を築き、良き隣人として、また、良き友人として、歴史に関する長期に亘る問題に取り組み、正しい認識を持ち、共に未来を築いていかなければならない。

元政治家である日中友好会館会長との交流や、国会議事堂等の視察といった活動を通して、日本の政治に対する理解を深めることができた。もちろん、福岡アジア都市研究所や福岡市役所での交流も、地方政治を理解するために役に立った。

○1. 印象に残っていること

日本の先進的な科学技術に驚いた。九州大学で「CEDEC+KYUSHU2016」を視察し、VR技術がもたらす視覚と直感の二重の衝撃を身をもって体験し、科学技術のイノベーションと研究・開発の分野の世界における日本のリーダーシップを思い知らされた。未来の発展の方向を見極め、時代の先頭に立ってこそ、永遠に勝ち続けることができるのだ。

2. 伝えたい情報

日本が環境保護の分野で収めている成功例を中国の友人たちにも伝えたい。環境汚染対策施設や処理技術はもちろん、自然を愛して敬う心や、私たちが生きていく住環境を守り、大切にすることを日本から学ぶべきだ。日本人の勤労、勤勉の精神や、法律を遵守し、公益のために尽くす心を中国の人々にも伝えたい。

KADOKAWA への会社訪問では、同社を代表とするアニメーションやコミック関係の出版社が、海外市場、とりわけ中国市場の開拓を積極的に行っていると知った。進出先の国情や現地の人材育成の実情を踏まえ、日本の技術や経験、経営理念を取り入れていくことで、準備段階の市場の育成や文化の違いによる問題の解決を図っている。また、地方都市の福岡市は地理的優位性を利用し、産学官の連携が街の魅力と発展の可能性を増幅させていたことが印象深い。

○最も印象に残っているのは10月18日に訪問した慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科で、その名声に恥じぬ内容を見せてもらった。同研究科の雑然としながらも活気のある実験室には、慶應義塾大学大学院に在学するやる気に満ちた留学生の姿があった。メディアデザイン研究科では盛りだくさんで素晴らしいレクチャーを拝聴した。同

大学が文化イノベーション産業の重要なR&D（研究開発）拠点になっている理由は、その便利な立地もさることながら、人間味のある管理体制や、思いやりに満ちた雰囲気と密接に関係している。教室は24時間対外的に開放されており、研究棟と地下鉄の駅は連結し、コンビニエンスストアやバー、娯楽施設が所々にある点も中国にはないことだ。その土地の生活コストの高さや、若者が感じるストレスは、イノベーションやクリエイティビティを抑制する要因になる。こうした部分も、中国は参考にするべきだ。

帰国後、伝えていきたい主な情報は次のとおりだ。

1. 都市計画が非常に巧みで趣深く、環境がとても清潔だ。インフラが完備しており、目立つ部分では視覚障害者用誘導ブロックや信号機的设计から、細かな部分ではホテルの洗濯ロープ用のフックまで、街は人への優しい気配りで溢れている。
2. イノベーションに関するモチベーションが強く、環境や制度が整っている。また、コンテンツ・イノベーション産業を奨励する健全なシステムがある。イノベーションデザインのコンテストなどで優れた人材を発掘し、優先的に企業で実習させることで、知的財産の転化と運用を促進している。
3. 日本の食文化や、食文化の普及方法を中国も見習うべきだ。中国はテレビ番組などで食文化を宣伝しているが、実際のところ、そこに文化はない。

イノベーションや知的財産権の保護の方面で、日本がこれほど優れているのはなぜなのか、ずっと不思議に思っていた。今回、ゲーム産業についてのレクチャーを聞いて、日本ではクリエイターたちにゆとりある仕事環境が提供されていること、また、知識集約型産業の発展の裏には非常に細やかな制度があることがわかった。これらがみな、イノベーションのための保障になっており、私たちが学ぶべき点である。

○日本について、訪問前はただメディアの報道から得た知識しかなく、製造業と科学技術が世界をリードしており、アニメや漫画を中心にコンテンツ分野でも大きな影響力を持ち、国民の素養が高い国ということしか知らなかった。実際に訪れてみると、製造業と科学技術だけではなく、多くの分野に匠の精神が息づいていることがわかった。一般市民も礼儀正しく、サービス業の従業員たちには教育が行き届いている。とても印象深かった。

今回、日本のコンテンツ産業に関する政策について学び、中国の政策と比較してみると気が付いたのは、日本は産業の発展に有利な市場の育成により力を入れているということだ。例えば、知的財産権の保護や、イノベーション推進のための人材育成と市場の開拓などがそうで、政府が強硬に市場介入を行ったりしない。つまり、日本は産業構造政策を重視している。これは、中国が今後産業政策を制定する際に学ぶべきところだ。

○今回の訪問で、印象深かったのは、「環境保護事業の発展」、「国民の素養」、「全体での発展構想」である。

1. 環境が美しく気持ちが良い。日本では、麵屋の店内にいたるまで、街中どこを訪れても衛生条件が良く、ゴミがほとんど見当たらない。自然環境も良く、空気もきれいで気候が清々しい。全体的な感覚として、とても快適に過ごせる。

2. 国民の素養が高い。今回の滞在中、非友好的な態度をとる日本人には誰ひとり出会う、ぎくしゃくした空気になることが一度もなかった。それどころか、日本人は謙虚で礼儀正しく、細やかでよく気が付き、サービスも行き届いている。とても印象深かった。外の通りでも、店の中でも、観光地でも、たとえホテルの中であっても、日本人は皆その場の空気を心得ており、文明的で礼儀正しい。ポイ捨てされるゴミもほとんどなく、ゴミ箱も見当たらない。日本人の素養の高さがよく表れていると思った。

3. 国全体での発展が集約化されている。日本は国土が狭く、人口は多いが、都市や農村計画において、資源の節約・有効利用を極限まで実施していると言える。どんな土地でも十分に活用し、秩序のある都市計画が立てられている。日本の建築物や設備の特徴は、どれもシンプルかつ実用的という点にある。華美ではないが品があり、実用的で丈夫だ。日本人に限られた資源の中で発展の道筋を考えていることの表れである。

帰国したら、日本人の素養の高さについて伝えたい。日本人の礼儀正しさ、細やかさ、勤勉さに学ぶべきだ。

○今回の訪日で、活動テーマに関して得られた知識のほかに最も印象深かったのは、日本人、とりわけ随員スタッフ全員の周到的な気遣いと温かなサービスだ。非常に満足したし、感動的だった。8日間という短い期間だったが、日本側スタッフとの交流を通じて、日本に対する認識を新たにした。日本は国民全体の素養が高い。交通ルールの遵守、効率的な仕事ぶり、時間の遵守、友好的で礼儀正しい態度など、我々も学ぶべきだ。

また、日本人は、文化の発展、歴史や伝統文化の保護と発揚を重視していると感じた。日本のアニメや漫画は既に、単行本、雑誌、ゲーム、映像作品、音楽など、様々な形式で展開する総合的なコンテンツ産業となっている。そのレベルは、他の国々をリードし、世界各国、とりわけアジアの国々に大きな影響を与えている。この分野においても、中国が学ぶべきことは多い。日中両国が文化産業の分野において、もっと力を合わせていけることを期待している。

帰国したら、周囲の人に今回の訪問で見たことや感じたことを伝えたい。秩序ある日本の社会、友好的な人々、文化産業の発展ぶりについて伝え、もっと大勢の中国人に日本を知ってもらいたいと思う。